第1章 游（たび）の奇絶の始まり

——郷里から都へ

■郭綸

嘉祐4（1059）年、蘇軾24歳。

10月、父・蘇洵、弟・蘇轍とともに郷里の眉州眉山県（現在の四川省眉山市）を船で発ち、都に向かった。軾と轍の兄弟は2年前の春に官吏登用試験の科擧（かきよ）に合格し、官職（かみ）に就くための上京であった。

（一行には、父子3人のほかに、兄弟のそれぞれの妻（王氏と史氏）、それぞれの乳母（任採蓮と楊金蟬）、そして軾の生まれたばかりの長男の邁（まい）がいた）

船は長江の支流の岷江を下り、嘉樹（かじゆ）という小さな町で、退役軍人の郭綸（かくりん）に出会った。これが現在伝えられる蘇軾の最も早い詩で、それ以前のことは船旅が一段落したところで見ることにする。

（原題を見出しとして掲げているので、原文を参照する際の助けにいただきたい）

老いた郭綸が勇猛な戦士であったのを知る人は、

いまこの町にはいない。

しがない役人としてあくせく働いても貧乏であるから、

この町の人は、

郭綸の乗る馬がひどく瘦せ細っているのをいつも見るだけで、

仮のやどりのぼろ小屋に、

巨大な鉄の槊^{さく}が置かれているのを見た者はいない。

郭綸は言う。

「あの槊を振りまわして、

わしは三日間の猛攻に耐え抜いた。

それで敵は引き揚げたのだ。

だが亡び去ったわけではない。

だから、わしはずっと一つのことを願っている。

いつか必ず一万の騎兵の先頭に立って、

今度は敵地へと攻め入るのだ」

私は言う。

「そのときがきたならば、

私も戦場に出て、

あなた方の放つ矢が敵陣に雨のように注がれるありさまを、

必ず見させてもらおうと約束しよう」

■初発嘉州

嘉州^かを過ぎると岷江は二つの川を合わせて水量がぐっと豊かになる。そ

の流れに乗ったときの詩。

朝、にぎやかな太鼓に送られて船は嘉州を発った。
折よく西風に送られ、帆柱の先で旗が軽やかにこはためく。
故郷はすでに遠く、
気持ちは船に先んじて遙か前へと飛んで行こうとする。
ともに下ってきた岷江の水はもはやそれとは見分けにくく、
新たに加わった水は清らかである。
川の勢いのままに、
高さ三百六十尺の石仏の足元を瞬間に通過したかと思うと、
今度は川幅が広がって悠然と平地を行くかのようになった。
ある禅僧と、
小さな町の釣魚台ちようぎょだいで会おうと約束しているのに、
船の歩みはちっとも速くならない。
どうとう川面からは夕靄が湧き立つところになって、
まだまだ先は遠い。
水のほとりにずっと立ち尽して、
僧はいまも待っていてくれるだろうか。

■ 犍為王氏書樓

犍けん為いという町で父の知人の王おう齊せい愈ゆの書樓を訪ねた。あいにくと王齊愈は遠方に出ていて留守であった。

木々が谷を埋めるその先に、
 高くそびえる樓観がある。
 昔から知られる書庫で、
 今も万卷の書物が塵をかぶっている。
 書樓のもとへと上ると、
 山の風に乗って窓辺に鳥が飛びかい、
 水のせせらぎにまじって猿の声がする。
 私たちは尋ねた。

「書樓のご主人はいまどちらでしょうか」

「ここしばらく遠くの地で辛苦に耐えています。

ときには、頭かぶに甲を載せて敵陣に突っ込み、

首を斬り合うようなことも覚悟しなければならぬようです。

読書三昧の暮らしはもうできなくなってしまいました」

「書物を友としていた者でも、

戦陣ためしに臨んだ例はたくさんあります。

諸葛孔明がまさにそうだったではありませんか」

そのように私は言ったものの、
閑雅と思えたこのあたりの風景が、
まるで違ったものに見え、
この世界に生きる悲しみを覚えた。

■過宜賓見夷中乱山

ぎひん宜賓を過ぎると、川をはさむ左右は、山また山のいわゆる「夷中いちゆうの乱山」
である。

山々にはさまれた谷の底は天から遠く離れ、
空が晴れているのかどうかもわからなかった。
明け方はことのほか寒く、
立ち昇る霧によって高い峰はすっかり包み込まれていた。
やがて湧き出るようにして岩の壁に光が射してくると、
雲の動きとともに、
崖の木々の一本一本がまざまざと見えてくるようになった。
ついに谷の底にまで日の光が落ちてきた——
私はそれを手ですくい取ろうとした。
そのとき谷の底から鳥が飛び上がり、
深い青空の中へと吸い込まれて行った。

ほん い

蛮夷の地であるこの風光を愛する者はいない。

心に適うものなどどこにもない。

だから、世を避ける人であるのなら、

心の鍛錬をするのにここをよしとしないとも限らない。

そのような人を尋ねてみたいと思っても、

山中の道には狼や虎の足跡ばかりがあって行くことができない。

■夜泊牛口

ぎゅうこう

牛口の岸边に船を繋いで一晩過ごした。

川から上り立つ薄い霧が、

落ち行く夕日によってほんのり赤く染められるようになったところに、

ようやく船を岸边に繋いだ。

古びた柳の下にたむろしていた三、四人が立ちあがり、

そろりそろりとこちらに寄ってきて、

「薪はいらんか」と売り始めた。

あたりには茅葺の小屋がばらばらと建っていた。

船から上がり、その小屋を見に行くと、

壁の間から星がのぞくような粗末な作りで、

夕食に煮ているものはいえ、

せいぜい野菜があるだけだった。

肉らしいものなどはなく、むろん酒もない。

それでも、子供たちの声は楽しげで、

わびしさを感じさせるものは一切なかった。

もしかしたら、

人生とは本来このようなものなのではあるまいか。

何か事があるわけでもないのに、

世の中のあれやこれやに誘われて、

苦しみが生じてしまうのだろう。

富貴の輝きが目の前にちらつけば、

貧賤を守り通そうとするのは難しい。

ここに生きる子供らは自然の友であろうとしている。

深い山の中の、いわゆる夷えいの地に身を置きながらも、

その姿にみにくさを感じさせるものは何もない。

あくせく世間を走り回るこの私は、

いったい何をしようとする者なのだろうか。

■牛口見月

その夜に月を見て。

人々が静かな眠りにつくと、
閉じられた船の窓の細いすき間から、
ひそやかに月の光が忍び込んできた。
私はそっと衣をまとって外に歩み出た。
すぐに夜露が降りてきて裾をぬらした。
山と川がひとつの色に染まっていた。
大空をひろびろと渡って行くような気分になって、
あたりをあてもなくさまよった。
いつしか私は都にきていて、
「川が切れたぞ」
との叫び声に驚かされた。
見ると、すでに都の半分はすっかり水びたして、
さっきまで馬や車が行き来していた道は、
いかだでなければ渡れないありさまになっていた。
一度水の出た町がぎらぎら輝く真夏の太陽に照らされると、
むっとする臭気でいっぱいになった。
今度はどこからともなくさわやかな秋の風が吹いてきて、
「りゅうしんきょう竜津橋のあたりで夜市が開かれるぞ」という声かした。
ふらふらとそちらに行ってみると、
無数の燈火がこうこう真昼のように煌々と輝き、

ものすごい人の多さだった。

あまりの喧騒に、逃げるようにして光の輪の外に出ると、

私は再びもとの川べりに立っていた。

月の光に乗じて、

三年前の都に帰っていたのだろうか。

これからはるばる旅路を重ねて、

世間の塵を浴びるためにわざわざまた都に行こうとしているのは、

いったいどうしてなのだろうか。

（「三年前の都」とは科挙の受験のために上京したことをいう。科挙は地方で受ける一次試験から、都で受ける二次試験、皇帝の面前で受ける三次試験まであり、蘇軾兄弟は地方出身者であるにもかかわらず一次試験も都で受けた。多くの人が憧れた宋の都も、蘇軾にはあまり好ましい印象を与えなかったようだ）

■ 戎州

少数民族との交易のための市が定期的^{じゅう}に開かれる戎州で。

古くからのこの町は無数の山に囲まれている。

山は痩せて耕す土地はわずかしかない。

それでもここに町があるのは、諸民族との境目であるからだ。

かつては異変の報せに、

軍馬があわただしく出て行って、
そのまま帰らぬこともあったと聞く。
いまは夜ものどかに時の鐘が響さわたるだけだ。
我が宋^{そう}の文化が広く浸透したのだろう、
あちこちから人々が宋の物品を求めてさかんにやってくる。
ただし金の耳飾りのようなものには関心がなく、
それぞれの民族特有の装飾品で満足しているようだ。
諸民族が互いに強弱を争って何の意味があろうか。
いまやすべては等しく宋の民であって、
見れば皆がそれぞれにいい表情をしているではないか。

■舟中聴大人弹琴

父^{たいじん}（大人）が船上で奏でる琴を聴いて。

川岸につないだ船の上、
父が奏でる琴の音に、襟を正して耳を傾ける。
夜が更けるにつれ、
我が心のうちが次第に高ぶってくる。
琴の音は、
松を吹く風、あるいは山にかかる滝、

清らかさを窮めるかと思えば、

ほうぎょく

宝玉が当たるように、からころと愛すべき音を響かせる。

遠い昔に生まれたつつましく雅な音楽が、

いつしか快感を呼び起こす淫らな楽曲にとって代わられて、

太古の楽器の数々がすたれてしまった。

幾千年を経て琴だけが残り、

老いた仙人が世の興亡を聞しつついま生きるかのようだ。

世間の人々は昔に返るのを好まず、

新しい曲を作っては、

琴に無理強いをして演奏してきたので、

本来のひそやかな音はことごとく崩されてしまった。

それでも非情の存在である琴はいまなおここにある。

いにしえ

古の人々の心はすでに遠く彼方に堕ちてしまったのか。

川の上に広がる広大無辺の空に月が昇り、

人々の暮らしが立てる音がすっかり途絶えた真夜中に至って、

父は太古の音楽をその当時さながらに奏でたのだった。

（遠い昔に理想の世があり、政治制度も文物も完全なものが整っていたとする尚古主義は、儒学を中核とする古い中国の伝統的価値観であった）

■泊南井口期任遵聖長官到晚不及見復来

なんせいこう 南井口で父の知人の任孜（字は遵聖）と会う約束していたのだが、そこに着くのが遅くなってしまって……

川のほとりに始まる一本の細い道。

あなたは別れを告げると、

深く草が茂ったその道を、

馬の足取りも頼りなげに歩み去った。

煙る雨にあなたの姿は融け込み、

私たちは尽すことができずに残った思いを抱いて船へと戻った。

しばらくすると、

ぼりぼりと蹄の音が聞こえた。

船から雨の中へとまた飛び出ると、

あなたがひらりと馬から降りた。

顔を見合わせ、誰もがまだ口をきかないうちに、

残されていた思いは慰められた。

あなたはほほえみ、

「町に帰るにはもう遅すぎました。

どこまでも長い川、

どこまでも広い大地、

そのどこででも、
いついかなるときであっても、
あなた方とお会いできるというわけではないのですから」

■江上看山

南井口の先の急流で。

船から見る山は、
まるで馬が駆け行くかのようだ。
前方から山が現れ出ると、
がらがらと馬に変身して、
足音も高らかに私のかたわらに向かって走ってくる。
山は次々に出てきて、
たちまち数百頭の馬群となって私の横を駆け抜ける。
後ろに振り返ると、
馬の群れはひしめき合いながら遠くへと走り去り、
がらがらと山に戻って消える。
いまもまた走り行く馬の背に、
見れば、一人の男がまたがっているではないか。
船の上の私は手を挙げ、

その人に向かって叫んだ。

すると、その声とともに私は飛んで山の上に至り、

船はその間にたちまち流れ去った。

うねうねと続く崖の小道に私は一人残され、

馬上にいた彼の人とはいうと、

船とともにいずこかに行ってしまった。

■ 過安楽山聞山上木葉有文如道士篆符云此山乃張道陵所寓二首

あんらくざん
安楽山という山に生える木には、葉の裏に文字のように見える模様があり、それは篆符（てんぶ天の意向を表わす符号）であるという。かつてこの山には道教の教派の一つご と べい どう五斗米道の始祖であるちやう どう りやう張道陵が住み、いまでも残るその靈威によって葉に篆符が現れるとされていた。山に建てられた道教の寺院には張道陵が自ら刻んだという玉印なるものが伝わり、それを押した符をふだ頂けば病気が治るという。2首のうち1首を訳す。

其の一

てんし
天師と崇められた張道陵は、

不老不死の仙人となっていまどこかにいるのだろうか。

天師の刻んだありがたい玉印が、

それからずっと子孫に伝わってきているらしいが、

肝心の不老不死の術は伝えられなかったのだらう、
子孫はこれまで一人残らずみんな死を免れなかった。
天師だけが生死の境を抜けて、
この世界の外に出て行ったのなら、
それはそれで結構であらうけれど、
なぜかよい評判を得ることにいまますこぶる熱心で、
ひと山に万本もある木の億兆もの葉の裏に、
せっせと文字を書き続けていなさるとは、
なんとご苦労千万ではあるまいか。

■留題仙都観

へいとざん平都山にはおうえん王遠、いんちやうせい陰長生の2人がしんじん仙人（真人）になって天に昇ったとい
う伝説があり、それに由来する道教の寺院、せんとかん仙都観があった。

山の前には川が広々と流れ、
山の上には木が高々と茂っている。
旅人は船を置いてそそくさと坂を登る。
路傍の秋の草が冬を迎えてたちまち枯れて行くように、
千年という歳月もそそくさと過ぎ去った。
そびえたつ仙都観に至ると、

この頂から、竜の曳く車、虎のかつぐ駕籠に乗って、
二人の真人が遥かな仙界に飛び去ったという。
真人はもはやこの世間を顧みることはなく、
人が生まれたり死んだりするのは、
せいぜい朝と夕の入れ替わりくらいにしか思っていないのだろう。
仙術を獲得しようとして、
米粒を断ち霞を食らう苦行に耐える人がいまいる。
私が望むのは、
無も有もないという哲理を会得して、
風に乗り雲に乗り、
世を超越した境地に至ることだ。

■仙都山鹿

仙都観のある山にすむ鹿はかつて仙人になった道士^{どうし}（道教の修行者）と一緒に暮らしていた白い鹿の子孫だという。

太陽と月があくせくと天空を走る下で、
人は地上の塵の世にがっかりとつながれている。
仙人は跡形もなく飛び去り、
山には鹿が遺された。

鹿は霞の彼方に真人を追い求めて悲しみ、
心が通じ合えそうな人がくると知ると、
松を揺らす風とともにしきりに鳴くという。
その鹿が夜の間に鳴いていたと聞いて、
はたして私がそれに該当する人間なのか、
鹿に尋ねてみたいと思っても、
山は秋の草におおわれ、
鹿の行方はどことも知れない。

(蘇洵一行が船から上がると、なぜか土地の長官が出迎え、「昨夜、鹿がしきりに鳴いたので、誰がくるのかと待っておりました。あなた方でありましたか」と言ったので、この詩で応じたのである)

■望夫台

屏風山びょうぶさんには人の形をした岩があり、望夫台ぼうふだいと呼ばれていた。

川が曲がり、船が廻り行くと、
山の上に連なる岩の壁は、
屏風を折り曲げるように姿を変える。
中に一つ、とりわけ抜きん出た岩があって、
あたかも人が屹立しているかのようだ。

かつてここに一人の妻がいて、
旅に出たままの夫がいまに帰ってくるのではないかと、
山に立って川を見続けるうちに、
岩になってしまったという。

岩は千古の昔も、昨日も同じ形であるけれど、
船は来ては船は去り、いつまでもとどまることなく、
川は流れては川は去り、いつもまでもとどまることがない。
私たちは川に浮かぶ木の葉のように大海へと流れ下る。
ああ、できることなら、あの山にしばし残って、
月が昇るのを待ちたいものだ。

月光が岩に当たって、
気高い妻の姿を浮かび上がらせるのを見たいから——。

(望夫台の妻の姿に、蘇軾は母を想ったと推測するのは、たぶん間違いではないだろう。蘇軾の父はしばしば放浪の旅に出て、母はその間、2人の息子を自分の手で教育した。その母は蘇軾兄弟が科挙に合格した直後に郷里で亡くなり、兄弟はそれから足掛け3年の喪に服した。その喪が明けたので、今回の旅に出たのである)

■八陣磧

夔州きには、諸葛孔明しよかつこうめいが石を積み、自ら発明した絶対に破れない最強の陣法を記録した「八陣図」はちじんずを残したとの言い伝えのある河原、八陣磧はちじんせきがあ

った。

広い河原に岩がごろごろころがっている。
あれとこれとそれが八陣図なのだろうか。
川に水がみなぎる季節がくると、
それらの岩はどれも流れの下に隠れてしまう。
諸葛孔明は死んで久しく、
岩の並びを弁別することはもはや誰にもできない。
たとえ岩の並びがきちんと保たれていても、
諸葛孔明の神のような用兵はそれらからでは会得できないだろう。
真に優れた人は自分で心に悟るのであって、
その要諦をかたちにして留め置けるものではない。
後世の人々は何もわからぬままに自説を立てるだけだ。
かつて英雄が並び立って競い合ったとき、
禍が次から次へと長く続き、
民衆は戦に駆り出されて野に倒れ川に血を流し、
町からは人影が消えて炊事の煙が立たなくなった。
英雄が大勝負に出ると、
民衆の命は雪に湯を注ぐようにしてかき消された。
目の前の戦闘にひたすら追いまぐられ、

遠く先を見通したはかりごとはどこにもなかった。

そこに諸葛孔明が現れ、群雄どもを一掃しようとした。

^{しよく}蜀は小国であったから節制を旨とし、

困難に耐えに耐えてその日がくるのを待った。

諸葛孔明の志は立派だったが、

計画は壮大すぎて遠回りをし、

歳月は瞬く間に流れ、

軍団が十分に整えられる前に、

英気は折れ、諸葛孔明は死んでしまった。

ここの河原に八陣図が残され、

その壮図は知れはしても、

民衆を禍から救うのに役立ちはしなかった。

(諸葛孔明^{しよかつりやう} (諸葛亮) は蘇軾より 800 年ほど昔の人であるが、蜀^{しよく} (眉山もそこに含まれる) の人々にとっては、何かにつけて語られることの多い郷里の偉人であった。この詩で蘇軾が諸葛孔明に批判的であるように見えるのは、尊敬の念が極めて深いこととの裏返しなのだろう)

■入峽

船は長江の最大の難関にして最大の景勝地である大峽谷、三峽へと入って行った。

昔から三峡の勝れた風光を想っていた。

今しもそれをほしいままに見てとれるところまできたのだ。

長江は蜀と楚を結び、

蜀の山から出てきた万本もの川がここで一本に束ねられ、

楚の平地へと注ぎ込まれる。

北東からきた水は電光のよにすばやく走り、

西からきた水は藍に似た緑で、

その他のところからきた水はどれがどれたか見分けようもないけれど、

互いに勢いを競おうとここに集まってくるのだ。

陸地に道らしきものがなくなって、

いよいよ深い峡谷のなかへと入る。

連なる山並みが一つの箱型の壁に変わり、

流れは、あるときは大きくゆるやかに巡り、

あるときはまっすくに伸びて急流となり、

またあるときはぐっと縮んでどっと落ち込みもする。

風は呼吸をするように谷を行きかい、

あるいは雲の上へと吐き出され、あるいは下へと吸い込まれる。

迫りくる崖は、

垂れ下がる緑の蔓、懸命にしがみつく青い竹、

それらもろともに、大きな音を立てて倒れかかってくるかのようだ。
滝となって落ちる水は吹雪のように宙を舞い、
駆け下る馬のように岩が落ちかかる。
不意に絶壁の高さが不揃いになると、
忽然としてそのなかほどに子供の姿が現れ出る。
岩にまわりついて人家の煙が流れ、
山あいの小さな村の真下に船は着く。
船をやっと繋げるだけの狭い岸边から、
竹駕籠に乗ってその村へと登ってみる。
このようなところにも人は住めるもので、
粗末ながらも役所の建物がある。
この地の名産という蜜柑を村の役人が勧めてくれるかたわらで、
夕べの太鼓がドーンドーンと鳴らされる。
村役はいささか誇らしげに、
こころでは寿命を延ばす薬草がたくさん採れると教えてくれる。
しかし、食に満ち足りて十分に長生きをしているような人は見当たらない。
それでも、ここでは昔からのことがらがよく語り継がれていて、
先人の苦労を大切に偲んでいるようだ。
家は板で屋根を葺いただけで瓦はなく、
巖を削り込んだだけのごく狭い住まいもある。

気候は冬も暖かであるというが、
薪を伐るにはかなりの危険を冒さねばならないだろう。
米を作るような土地はほんのわずかしがなく、
暮らしの厳しさは並大抵ではないようだ。
土地の人が舟を操る腕前はさすがにみごとで、
大波がどこで生じるのかすべてよくわきまえ、
木の葉のような小さな舟でかかると大河をさかのぼる。
人々の矍鑠とした姿は見惚れるばかりだ。
残念なことに、土地の言葉はよくわからないので、
私などはここには住めそうになく、
この地の奥深い趣きを味わうには至らないだろう。
いまも一羽の鶺鴒こいが飛び上がり、
大河の上の百尺の厚みのある霧を超え、その上へと出て行った。
横に滑空する鶺鴒には、自ら心に得るものがあるように見え、
遠く消え去る前に翻るのは、
あえて楽しみを貪るまいとしているのだろうか。
そして悠々と翼を振るって雲間に遊び、
他の鳥のことなど気にもかけていないようだ。
人の世は塵にまみれ、病んでいるのではあるまいか。
そこであくせくすることに私は耐えられるだろうか。

万物は自然の内に生きるよさを知っているのに、
人は富貴の喜びを優先させてしまう。
飛ぶ鳥の楽しみを見るがよい、
高くあって心満たされているではないか。

■巫山 - 出峡

三峽を通過する間に複数の詩が詠まれた。それらから適宜抜粋して一つの訳詩を組み立てると……。

峡谷に入ったばかりのころは断崖の奇観を喜んだけれど、
峡谷を出ようとするころになると、
広く平らかな大地が恋しくてならない。
ついに峡谷が終わるところにまできて、
ずっと圧迫されていた心が、
ふっとのびやかに解放され、
過ぎ去ったあれやこれやが一気に思い返される。
峡谷は西から東へ千里にわたり、
風光の勝れたところが多々あった。
陸に見るべきところがあると聞けば、船を泊め、
遠くも高さも厭わず、私は人々の先頭に立って訪ねまわった。

三峡の最初の瞿塘峡くとうきょうが終わると
すくにあたかも鳴り物入りで巫峡ふきょうが現われ出て、
連なる峰は怪しさ満載で、
岩の色はあるいは青くあるいは緑で、
天の職人かみわざが神技を駆使して深く周回込んだその意匠は、
いまま未完成であるらしく、
生々しい荒々しさにかたときも目を放すことができなかった。
その巫峡には巫山の十二峰があると聞いた。
しかし、次から次へと迫りくる絶壁に怖気づいて、
八ないし九の峰を認め得ただけだった。
川の水の湧き立つようなところで、
この上の高みに神女廟しんじょびょうがあると聞いて、
岸辺にしがみつこうにして陸にあがった。
上へと登って、岩に腰をおろすと、
ごうごうと音を立てて流れ下る大河の水が、わが身からやっとな離れ、
ほっと息をつくことができた。
するとにわかに鳥が騒ぎ出した。
次から次へと峡谷の両側の壁から湧き出したかと思うと、
船から高く投げ上げられた餌を目指し、
その一点へと無数の鳥が集中した。

鳥は神の使いとしてすっかり人に馴れている。

神女廟に詣でての帰り道で、冷たい泉が湧いているのを見つけた。

手にすくうと、青くきらきらと光り、

まことに愛すべき水だった。

巫峡の終わりぎわには、

崖にぽっかりとあいた空洞のようなものがあった。

真下から見上げると青い空が覗けた。

そこは石づくりの古い孔子廟で、

木と木を結んで中空に鉄の欄干がかかっていた。

その高さは何丈あるとも知れず、

下にめまぐるしく姿を変える波があるのに、

誰がそのようなものを架けたのだろうか。

巫峡を下り切ると、その勢いのままに船を走らせ、

巴東県では泊まらなかった。

巴東は若き日の寇準の任地だ。

寇準は峡谷のなかかまどのこの寂しい土地にくると、

もっぱら民衆のために励み、

人々に賦役を課さなければならないときになっても、

責め立てるようなことはしないで、

納めるべき人の名を記した板を役場の門に掲げ、

自ら納めにくるのを待った。

寇準が植えた松がいまもあって民衆が大切に守っているという。

山と川の織り成す自然の厳しさが、

豪俊な寇準を養い育てたのだらう。

三峡の最後は西陵峡で、

そこに入って三十里、

山の裾を船が回りかけると、

まだ見えてこないうちから、

私は驚きに打ちのめされた。

白い波が川幅いっぱい湧き立ち、

まるで雪の城壁が山の高さにまでせり上げられてから、

深い谷底へと下り落ちるのだった。

いかなる魚もそこをさかのぼることはできないし、

いかなる鳥もそこに近づくことができない。

そのような急な瀬を通過するのに、

船を操る人の腕前などはあてにできないから、

酒を供えて神様に無事を祈った。

こともあろうに、そのときいきなりひどい風にあおられ、

船はにっちもさっちも進めなくなった。

始めは北の崖から扇であおぐくらいの風が吹きおりにただけだったのに、

びゅうっとひとたび川面を疾走するや、
雲が右に左にびゅんびゅん飛びかかって峡谷をたちまち塞ぎ、
ばしばしと船の窓に雪が打ち付けるまでになった。
手近な岸边に纜を短くして船をしっかりと繋ぎ、
それからのひと晩は、
ぎしぎしと船体がぎしる音に大いに悩まされた。
昔から、悪い天気も明け方までというのに、
朝になっても風雪は少しもおさまらなかつた。
これはここを司る神様が遠来の客を大いに歓迎して、
長く引き止めようとの有難い厚意だったのか、
結局は三日間もいつくことになった。
仕方なく船から上ってそこの村を訪ね、
土地の酒を買い求めて飲んだのが唯一楽しいことであつた。
幸いそこも抜けられて、^{こうぎゅうびょう}黄牛廟の下にまでくると、
「ここらはどこも岩の壁、道などありません」
船頭がそう言ったので、廟を遠く見上げただけで通過した。
次に、^{ぎょくきょどう}玉虚洞という立派な洞窟があると聞いていたところにまでくると、
「ここらはどこも岩の壁、道などありません」
船頭は同じことを言ったので、これはどうやら、
坂が陰しかろうが道が遠かろうが、私が一切構わずにずんずん行ってしまうの

で、

旅路は何かと遅れがちで、

船頭があきれて適当なことを言っただけなのだろう。

しかし、船というものは船頭に任せるしかないので、

玉虚洞はその晩の夢で訪れてすませたのだった。

このような次第では、

無数にある三峡の奇偉を幾つ見逃したかわからない。

かくて重なる危険を無事に脱し、

ついに今朝は広くゆるやかな流れを目にすることとなった。

ここから先は魚が豊富でうまいというから、

順風にも恵まれて旅はますます楽しくなることだろう。

（この詩の途中で詠まれている寇準は蘇軾よりも 70 年余り先輩で、宋代の士大夫したいふのあるべき手本を示した人物である。宋代の士大夫とは、科挙に合格して官僚になった人々（あるいは官僚にならなくてもその志があった人も）を指す。出自によらず実力で政界に入った人々が社会の主役になったのが宋という時代の最大の特徴で、寇準の父は下級の役人であったが、寇準は 19 歳で科挙に合格し、最高位の宰相にまで昇り、文字通りの国家存亡の危機を救う活躍をした）

■夷陵県欧陽永叔至喜堂

三峡を出ると長江の流れは緩やかになり、夷陵いりょうという小さな町に着いた。

そこは蘇父子にとって大恩人である欧陽脩（字は永叔）が若い頃に流された土地で、^{し き どう}至喜堂というゆかりの建物が残されていた。

夷陵は長江の中流域に位置することから、

その昔は、戦略的に重要な場所とされた。

平和な時代になると、

この地から英雄が出るということはなくなり、

地方のただの小さな県になった。

そこにひょんなことから、

文学上の勇者が都から流されてきて、

このあたりを歩いては詩を詠み文章を書いたので、

一躍、夷陵の名がまた高められた。

その人がここを去ってから幾年もが経ち、

その人が住んでいた至喜堂がややもすると傾いてしまうのを、

土地の人は毎年きちんきちんと修繕している。

その人が植えた橘は霜にあたって枯れたけれど、

その人が植えた楠は大きく立派になっている。

土地の人は私たちに尋ねた。

「うちの長官様はもう髪がまっしろでしょうなあ」

「ええ、ええ、その通りですとも。

何しろ自分の楽しみなど少しもなしに、
国のために年から年中頭を悩ませて文章を作っておられるのですから」
——というわけで、土地に人に代わって、
先生に遠く言葉を寄せようと思う。

「たまにはゆったりなさせて、
お酒でも召しあがるのがよろしいではありませんか」

(この詩の終わりの部分は、歐陽脩が若い頃から白髪が多かったことに基づくいわゆる「楽屋落ち」である。大恩人でありながら笑いを誘うような結びを置いたのはそれだけ心を許せる関係にあったからだろう)

■南行前集敘

一行は嘉祐^{かゆう}4 (1059) 年の暮れに荊州^{けいしゅう}に到着し、船を降りてしばらくそこに滞在した。そこまでの旅の間に詠んだ父子3人の詩を集めて『南行^{なんこう}集』と題する詩集を編み、この序文を書いた。後に、旅の後半の詩を編集して『南行後集』としたので、この序文は「南行前集敘」と呼ばれるようになった。

昔の詩文を作った人たちは作るのがもともとから上手だったから、巧みな詩文ができあがったのではない。作らずにはいられなかったから巧みな詩文になったのである。

山や川には雲や霧がある。草や木には花や実がある。ふつふつと何かしら内側に充満するものがあって、それが外に現われ出たのが、雲や霧、花や実であって、雲や霧、花や実が存在しないままではいようとしても、それはできないのである。

私は若いころから家君かきん(父)が文を論じるの聞いて、古の聖人せいじんはどうしても止めることができなくて詩文を作ったのだと考えるようになった。だから、私と弟はたくさんの詩文を書いてはいるけれども、詩文をこしらえようとの気持ちはこれまで持ったことがない。

己亥つちのといの歳(嘉祐4年)に、父の旅に伴って楚そに向かった。舟の中では何もする事がなく、かといって、博打や飲酒は家族で楽しむものではない。一方で、山や川はすぐれて美しく、川沿いの風俗は素朴であったり粗末であったりし、そこには賢人や君子の遺跡もあり、それらありとあらゆる耳目に接するものが、さまざまに身の内にあるものに触れ、詠嘆となって外に出てきた。こうして生まれ出てきた詩文は、家君の作と弟の作も合わせるとおよそ一百篇となった。これを『南行集』と名付ける。

一回限りの事をこのように記すことで、後に繰り返し尋ねるよすがにしようと思う。これらは談笑する間に生まれ出たもので、書こうと思って書いたのではない。

時に十二月八日、江陵こうりょう駅にて書く。

(最後にある「江陵」とは荊州の異称。この序文には蘇軾の文学観がよく表れている)

■眉州遠景楼記

蘇軾が荊州に留まっている間に、蘇軾の生い立ちを見ておきたい。蘇軾は景祐3（1036）年12月19日に眉州眉山県紗縠行に生まれた。

（蘇軾の出自は、蘇軾が亡くなった後で弟が記した墓誌銘（「亡兄子瞻端明墓誌銘」）に簡潔にまとめられている。墓誌銘の初めの一部をここに訳す。「公」とあるのが兄のことである。

公の諱は軾、姓は蘇、字は子瞻、和仲という字もあった。家は代々眉山にあり、曾祖父の諱は杲、太子太保を贈られ、妻は宋氏、昌国太夫人に追封された。祖父の諱は序、太子太傅を贈られ、妻は史氏、嘉国太夫人に追封された。父の諱は洵、太子太師を贈られ、妻は程氏、成国太夫人に追封された。

公が十歳の頃、先君（父）は各地を巡って学び歩いていたので、太夫人（母）が自ら書物を使って教育した。公が古今の歴史の興亡について尋ねると、太夫人はすぐにその要点を語った。太夫人はあるとき『東漢史』（後漢書）を読んでいて（音読して）、「范滂伝」に至ると、慨然と大きく嘆息した。傍らにいた公は言った。「私がかもも范滂のような行動をとりましたら、母上はやはり許して下さいませんか」。太夫人は言った。「そなたが范滂になれて、私が范滂の母になれないなどということがありませんか」。公が発奮して世に大きな働きをしようとの志を抱いたので、太夫人は「私にはこの子がある」と喜んだ。

幾つか補足する。(1) 旧い中国では、本名（諱）を他人が直接呼ぶのは非礼とされ、別名の字が用いられた。この訳では、煩雑さを避け、基本的に諱を用いる。(2) 曾祖父以下が「太子〇〇」を贈られ、その妻が「〇〇太夫人」に追封されたとあるのは、

子や子孫が大官に昇ったことで、そのような称号が朝廷から贈られたことをいう。自分が出世することが先祖の榮譽にもなったのである。(3) 范滂は後漢時代の人で、当時の国政を乱していた宦官かんがんと対立して都を追われて郷里に帰った。范滂を憎む人々は皇帝の命令書をでっちあげ、范滂を逮捕する役人を派遣した。県の知事は范滂に逃げるよう勧めたが、范滂は法を破る悪行はできないと、自ら赴いて逮捕された。范滂の母は息子の行動を讃えた。(4) 10歳の兄と母のやりとりを弟は傍らぼうらにいて聞いていたのだろうか。弟は宝元ほうげん2(1039)年2月20日生まれ、兄とはほぼ2年の開きがある)

蘇軾の郷里の眉山がどのような土地柄であったのか、蘇軾自身が「眉州びしゅう遠景楼記えんけいろうき」に詳しく記している。これは本章で見ている都への旅の20年ほど後の元豊元げんぽう(1078)年に執筆されたものだ。

我が州の風俗ふうぶくには、古いにしへに近いものが三つある。

(一)士大夫しだいふは儒学の古典を貴び、一族の伝統を重んじる。(二)民衆は役人を敬い、法を畏れる。(三)農民は一緒に農作業に励み、互いに助け合う。

これは、夏、殷、周の三代や、漢や唐の昔の風俗の名残がいまに伝わるのであって、他の地域の及ばないところである。

宋の朝廷は、始めのころは音律の整った美文を書ける者を官僚として採用した。そのため、四代皇帝てんせいの天聖年間以前の学者は宋の前の五代時代ごだいの(上辺を飾って中味が無い)欠陥をそのまま受け継いでいた。我が州の士大夫だけは、古

典に通じて古を学び、漢の時代の文学を手本としていた。このとき、他の地域の
人々は我が州の人々は迂闊である(古臭いことばかり言って世事に疎く役立たず
である)と批判した。郡や県の下役人に至るまで、皆が古典を手元に置き、それ
を範として筆を執り人に応対し行動したので、なかなか立派なありさまであった。
そして、名門の人、世に顕れた人は互いに家柄を尊重しあい、甲乙の序列がき
ちんと定まっていた。このような人たちを「江郷」といい、たとえ高位に昇ったり富ん
だりしても、「江郷」同士でなければ婚姻することはなかった。

眉山の民衆が州知事や県知事に仕えるありさまは、古の君臣関係を想わせるところがある。知事が去った後でも、その肖像画を描いて奉仕し続ける。特に賢明であった知事に対しては、その人が行ったことを記録し、語り継いで、四、五十年経っても忘れないようにする。商人や町民はいつも善い物を別にして、官からの求めにすぐに応じられるようにしている。家には法令書が備えられ、いつでもそれに通曉して、誤ったことをしないようにしている。ごくごく小さな罪も、一生の間に犯さない者がたくさんいる。

眉山では二月に農事が始まる。四月の初めは、穀類はまだ稚く雑草の勢いが盛んである。このときに人々は一斉に草刈りに出る。数十人から百人が一つの班を構成する。目印を立て、水の流れて時間を計る道具(漏)を据え、太鼓を鳴らして人々を集める。皆から尊敬をされている者を二人選び、一人が太鼓を鳴らし、一人が時間を計る。進むのも退くのも、作業に掛かるのも止めるのも、ただこの二人の指図に従う。太鼓を鳴らしても出てこない者、きても力を出して努めない者には

罰金が課せられる。農地の広さと作業量を測り、仕事が終わるとそれらを評価し、農地が広いのに働き手が少なかった者は、銭を出して皆への償いとする。七月の満月の翌日、穀物はすでに収穫され、雑草は衰えたので、太鼓をはずし、「漏」を壊し、罰金と人々に償う銭を集め、羊や豚あまぎの肉、酒や醴あまぎを買う。田の神を祭り、音楽を演奏し、飲みかつ食べ、酔って満腹となってから帰る。これが毎年の恒例である。

以上が眉山の風俗のあらましで、このようであるか眉山の人は皆が聡明で才智があり、基本に忠実で一生懸命に働くので、治めやすく、しかし服従させるのは難しい。新しい知事がくると、その人が話すこと、その人がすることを見て、その人となり^{なり}を納得するまで観察する。もしも頭脳明晰で能力があると知れると、何か事を起こして知事の出方を確かめようとするようなことはもはやなく、後は知事は朝から晩まで静かな日々を過ごせばよい。もしも知事のすることが道理に合致しないようであれば、筋を通し法を根拠として知事を徹底的に批判する。だから、眉山の風俗を知らない者は治め難いというのだ。

いまの知事れいじゅんの黎錚侯は、私の父の友人であった。つましく、一方で華やかであり、剛直であり、一方で仁愛に富み、明察であり、一方で苛酷ではない。それで人々は仕えやすいと思い、任期が満ちて交替になるときがくると、去ってしまうのを残念がり、皆で引き留めようとした。朝廷はその請願を聞き入れ、さらに眉山に留まること三年となり、民衆は知事をますます信頼して、何事もなく治まっている。そこで、知事は住まいの北側の土堀に寄り添うようにして建物を増築し、これを遠えん

けいろう

景楼と名付け、その上で日ごと客人や役所の人間と遊んで過ごしているのである。

私はいま徐州じゅうにいて、我が州の人と手紙のやりとりをするたびに、黎侯のすばらしが書かれていないことはない。そして、遠景楼について文章を書くよう眉州の人に依頼され、このように記すことになった。

私は、故郷を去ってすでに久しい。遠景楼はそのあるところを想い浮かべることはできて、その詳細を述べることは私にはできない。州の人々がこの楼があるのを喜び、そのことを記してほしいと思う気持ちは、私にもよくわかる。上に仕えやすい長官がいて、下に治めやすい風俗がある、そのことこそが何よりもよいのだ。

こうし

孔子はこのように言っている。「昔の史官は不明の文字があると空白のままにした。昔の人は馬を手に入れると他の人に貸して乗り馴らしてもらった。いまはそのようなことはない」。この二つのことは、根本の道理みち(道)を大きく損なったり、大きな益をもたらしたりするような事柄ではない。それでも、人の世の美德が失われて行くのは残念あるとして孔子のこの言葉が記録されたのだ。

我が州の古に近い風俗がここにだけ世を累ねても変化しないているのは、昔の人やいまの老人たちが生きることを楽しんできた恵みによるものであり、賢明な知事が倦まずたゆまず民衆を慈しみ指導してきた力によるものである。これは記録しないでよいものではない。

遠景楼に登ってあたりを見ることの楽しさ、そして山川風物の美しさを記述するのは、私がいっつか隠退して故郷に帰り、老隠居の姿で知事のお供をしてそこに登り、

酒がたげなわ闌のことなって演奏される音楽を聞きながら、筆を執って賦を作り、黎侯の遺された愛を讃えるときであっても、まだ遅すぎはしないであろう。

元豊元年七月十五日に記す。

(この文章で蘇軾は過剰なまでに郷里の風俗を讃えている。郷土愛の表れと理解すべきだろう。家柄を尊重することを美德として挙げているが、蘇軾自身は「江郷」の出身ではない。蘇軾の生家は眉山しゃこくこう県紗穀行にあり、そこは絹などを扱う商人が集まり住むところで、蘇軾の先祖はそうした商人であったと推測されている。この文章では、眉山の人々は士大夫(中でも特に家柄がよいのが江郷)、農民、商賈しょうこう小民(商人・職人)の三階層に分けられていて、町に住む商賈小民は江戸時代の士農工商と同じく、最も下位に置かれていた。蘇洵はあるとき先祖の系譜を調べ、蘇臬そこう(「墓誌銘」にあった蘇軾の曾祖父)のさらに祖父の名まではわかったもののそれより前に遡ることはできなかった。名の知れた限りの先祖で官職に就いた者は1人もいなかったので、「江郷」でなかったことは明らかである。蘇臬のころから(たぶん商売によって)貯えた財で農地を買い求め、次の蘇序の代になるとある程度家が豊かになったので、蘇序は3人の息子に学問を習わせることにした。ところが蘇洵は(たぶん商売の方が面白くて)書物には見向きもせず、諸国を歩き回っていた。それでも、蘇洵は妻を、ほぼ確実に「江郷」であったと推測される程の家から迎えられたのは、蘇の家が昇り調子にあったからだろう。蘇洵の妻が息子に史書を読んで教えられただけの学識を具えていたのは、実家が「江郷」だったからで、蘇洵は長らく妻の実家に対して頭が上がらなかった。蘇洵の兄の蘇渙そかんは学問に励み、眉山の蘇家で初めて科挙に合格し、一気に社会的

地位が上がった。それを見て、蘇洵は 27 歳でついに発奮して学問に向かった。つまり、蘇家は数代にわたって商賈小民から江郷に並ぶところにまで昇ろうと不断の努力を重ねてきたのだった)

■衆妙堂記

蘇軾は 8 歳のときに、父に連れられて「小学」(寺子屋^{しょうがく})に入った。その先生が張易簡^{ちやういかん}という道士であったことは、遙か後年^{げんぶ}の元符元(1098)年に記した次の文章から知られる。

眉山の道士の張易簡は「小学」で教え、いつも百人ほどの生徒がいた。私は幼い頃にそこに通った。学校は天慶觀^{てんけいかん}の北極院^{ほっきょくいん}にあり、三年ほど張先生について学んだ。

私はいま海南島^{かいなん}に流され、ある日、夢に学校に行き、昔のままの張先生とお会いた。

先生は庭を掃き清めていて、誰かがくるのを待っているかのようだった。

「老先生がじきやってこられる」

張先生がそう言うと、二人の者を連れて老先生が現れた。二人は『老子』^{らうし}の言葉を朗唱した。

「玄^{げん}のまた玄^{しゅうみょう}、衆妙の門……」

かつて私も張先生の学校で同じように朗唱していた。私ははたと思った——「玄^{おんふかき}」

のまた奥おくふかきに「玄」がある。そのまた奥の奥たえなるものにももの根源、「妙」がある。その
 「妙」からたくさん「妙」が出てくる。だから、「衆妙しゅうみょうの門」という。ならば……

私は張先生に尋ねた。

「妙みょうとはものの根源、そうならばそれは一いちであるのではないのでしょうか。一でありながらどうして衆しゅうを容れられるのでしょうか」

張先生は笑って言った。

「一だけではつまらんだろう。つまらなくては一たえなるもの妙たえなるものではあるまい。本当に妙たえなるものなら、
 たくさんあったほうがよくなるかな」

張先生がそのように言うと、二人の者の一方は水を撒き、一方は草を刈り始めた。

「おのおのみょう一つの妙を見せてくれるであろう」

張先生がそう言ったので、私は注視していると、二人の者は手をものすごい勢いで動かし、庭の内で風雨が渦巻いた。たちまち雲が散じ、霧が晴れると、見たこともない花々があたり一面に咲き乱れ、無数の鳥や虫が輝く姿を現した。

私は驚き、「これが衆妙しゅうみょうなのでありませんか」と言った。

一人の者が言った。

「何のこれしき、あなたはまだ真の妙を見ていない。我等の技はまだまだ道半ばで、
 これより先くうは空くうの空へと入り行き、そこは行くと思っで行けるところではない」
 もう一人の者が言った。

「あの蟬を見るがよい。蟬は木に登って鳴き続けて止むときがない。蟬は木に登る

う、そして鳴こうと思ったから、あのようになったのではない。地中の闇にいたときには、見ることもなく聞くこともなく、飢えることもなく渴くこともなく、ぴくりとも動かずにじっとしていた。あるとき忽然と地上に現れ出て、あのようになった。いかなる聖人の知恵も及ばず、いかなる名工の技も及ばない」

すでに姿を消していた老先生の後を追って二人の者は庭から出て行こうとした。茫然としている私に向かって張先生は言った。

「まあ、心を落ち着けるがよい。老先生がまたこられたときにさらに問うてみよ」

すると二人の者が振り返って言った。

「老先生も御存知ではない。蟬に問うべきである。養生と長生が得られるであろう」

——夢はここで終わった。

その後、こう 広州の道士のそうどう 崇道大師から「道を学んで妙に至ることを思い、近頃建てた堂に『衆妙』と名付けました。そのことを記した文書を書いてくださらぬか」との手紙が届いた。よって、夢の話を書いて、崇道大師への返事とする。

(この訳文は原文からかけ離れた極端な意識である。張先生の問答が理解し難いためである。それはともかくとして、蘇軾は張易簡の学校で道教の經典を習い(もちろん儒学の經典も教わった)、そのときは意味がわからないままに朗読していたにしても、蘇軾の精神の基底を構成する重要な要素となった)

■范文正公集叙

張易簡の学校で、ある日、蘇軾の進路を決定づけるような印象的な出来事があった。そのことについて、元祐4（1089）年に蘇軾が編集した范仲淹はんちゆうの文集の序文の中で書いている。范仲淹は宋代の士大夫のみならず、後世の志ある者から手本と仰がれた人物である。

慶曆三（1043）年のこと、私は八歳で土地の学校に入った。間もなく、ある文士が都から石介せきかいの作った「慶曆聖徳の詩」けいれきせいとくを携えてやってきた。学校の先生がそれを読んで、私を横からのぞき見た。

それが現在特に優れる十一人を讃える詩であると聞いて、「どのような方々なのでしょうか」と私は先生に尋ねた。

「君のような子どもにはまだわかるまい」と先生は言った。

「それが天の上の人であるのならわからないということもあるでしょう。でも、同じ地上の人であるのならわからないことはないはずです」。

私の返答に先生は驚き、その詩を読んでくれた。そして、「このなかでも韓琦、范仲淹ちゆうえん、富弼ふひつ、歐陽脩おうようしゆうの四人は人傑である」と言った。

このときはまだきちんと理解できたわけではなかったが、四人の名ははっきりと記憶に刻まれた。

二十二歳のときに都に行くと、范仲淹はすでに亡くなっていて、歐陽脩が記した墓誌を読み、「その人のあることを知って十五年、しかし、ついにお顔を見ることが

かなわなかったのは運命なのだろうか」と嘆き悲しんだ。私は科挙に合格し、初めて歐陽脩に会うことができ、その紹介で韓琦とも富弼とも会えた。三人は口を揃えて「残念なのは君が范仲淹に会えなかったことだ」と私に言った。

それから三年後に私は許州で范仲淹の長男の范純仁はんじゅんじんに会い、また六年後に都でその弟の范純礼はんじゅんれいに会い、さらに十一年後に末の弟の范純粹はんじゅんずいと同僚になった。皆と会ってすぐに旧知の仲のようになった。私は范兄弟から父上の遺稿を託され、文集を編集して、それに序文を添えてほしいと頼まれた。それから十三年が経っていまようやくその約束を果たせるに至った。

范仲淹の功績と徳は、その文章があって初めて世に知れるのではない。その文章は、序文があって初めて世に遺されるのではない。それでも文集を編集し序文を記すのをあえて辞退しないのは、八歳で范仲淹を敬うことを知って四十七年になり、他の三傑とは交わりを結ぶことができたのに、范仲淹一人とは知り合えずにいたのを平生の恨みとし、その人の書いた文章の脇に我が名を掲げることでその人の門下生の最後の一人であるかのようになれるのならば、ついに願いを叶えたのに近かろうかと思うからだ。

古の立派な人々が天下のために貢献した事績を見ると、それを為しとげた基本的な姿勢は、国に仕えてから学んで得たものではなく、庶民のなかで暮らしていたときからすでに身に備わっていたものであった。漢の劉邦かん りゅうほうが天下を平定するのを助けた韓信かんしんは、劉邦と会った最初のときすでに遠い見通しを持っていたし、諸葛孔明かつこうめいも草庵しよく りゅうびに尋ねてきた蜀の劉備と初めて会ったときすぐに何をすべきかを語

り、終生それを貫いた。人に尋ね、聞いたことを試してみ、成功したらよしとするようなことではなかったのである。

范仲淹は母上が亡くなって喪に服していた間に、天下のありさまを見て、いかにして民衆に泰平をもたらすかをつらつら考え、一万字に及ぶ文章を書いて時の宰相に送った。天下の人々はその文章を読んだ。後に范仲淹が国政の改革に取り組んで副宰相にまでなっていたこと、あるいは平生に為したところのものは、皆この文章に記されていた通りであった。

范仲淹の遺稿二十巻をここに編み、詩賦は二百六十八、文章は百六十五に及ぶ。これらを見れば、范仲淹が仁義礼楽忠信孝悌を思うのは、飢えて食するのを思い、渴いて飲むのを思うのと同じで、片時も忘れようとしてもできなかったことであつたというのがわかる。その心は火のように熱く、その情は水のように潤い、天性からしてそのようであつた。慰めに、あるいは戯れに、もしくは瞬時に作った詩文であっても、その天性から出たものであるから、天下の人々はその真心に打たれ、争って師として尊ぶのである。

孔子は「徳ある者には必ずしかるべき言葉がある」と言った。それはしかるべき言葉が初めにあってその人の口から出てくるのではない。徳のある人の口が発するからしかるべき言葉となるのである。

(この序文に記されている通り、8歳の蘇軾は、韓琦、范仲淹、富弼、欧陽脩の4人の名を聞き、いつかその4人とともに天下のために働きたいと思った。范仲淹は実際に会えなかっただけに理想の士大夫として蘇軾の心に強く残り続けた。また欧陽脩は

蘇父子にとってかけがえのない大恩人となる)

(以上の 3 篇の文章から、蘇軾の生い立ちのあらましを知ることができたであろう。慶暦 7 (1047) 年、蘇軾が 12 歳のとき、祖父の蘇序が亡くなり、官職に就いていた伯父の蘇渙が帰郷した。蘇渙が科挙に合格したのは、蘇軾が生まれる 12 年も前で、それ以来蘇渙はずっと外で官の仕事にあつたので、蘇軾は初めて伯父と会い、強い印象を受けた。それによって、上記の 4 人に少しでも近付きたいとの思いはさらに増した。とはいうものの、一心不乱に勉強して科挙を目指したというほど蘇軾少年は単純ではなかった。張易簡の学校で道教について教わった影響もあつたのだろう、自然の中で暮らす隠遁者にも強く憧れ、役人になるべきかの真剣に悩んだ時期もあつた。そのことは本章で見てきた幾つかの詩にも反映されている)

■荊州十首

か せう
嘉祐 5 (1060)、蘇軾 25 歳。

都への旅に戻ると、蘇軾は 1 月 5 日まで荊州に滞在し、その間に、杜甫と ほの「秦州雜詩二十首」を念頭に置いた一連の詩を詠んだ。このとき蜀しよくの人間であるとの意識がかなり強くあつたようだ。10 首から 6 首を訳す。

其の一

さんきやう
旅人が三峡を出ると、

そこから先はどこまでも平らだ。

^{しよく}蜀の川は山地を切断していたが、

^そ楚の川は平野を切断する。

蜀から下って来た船は、

^こ呉から上って来た船に囲まれる。

蜀の山から来た人間は平地の商売人にまどわされ、

砂を巻き上げる平地のつむじ風にもまどわされる。

荊州の町を囲む堂々とした城壁を見れば、

蜀と楚の間には長い興亡の歴史があったことを、

思わないわけにはいかない。

其の二

荊州から南を見やれば、

古戦場が多々あり、

英雄の猛き思いや、

忠臣の清き思いが、

いまでも感じ取れるかのようだ。

古く繁栄した町は消え去り、

井戸を囲んだだけの小さな村が残り、

そこには昔ながらの姓を保つ人々が住んでいる。

古今に変わらぬ大地のありさまは目には明らかでも、

歴史の上がり下がり、
軽々しく論じるわけにはいかないのだろう。

其の三

楚の地は限りなく広く、
遠くぼんやりとどこまでも田畑が連なる。
そこに汗水垂らして働く人の姿を見ないのは、
植えたら植えっぱなしということなのだろうか。
己の怠け癖を何とかしようという様子がまるでないのは、
愚かというべきか、哀れというべきか。
これで凶作に見舞われたら、
年のめぐりが悪かったと、恨んですませるつもりなのだろうか。

其の四

荊州の町を囲む高い城壁の東の隅に、
ぼうさろう
望沙楼の高い朱塗りの欄干がある。
こうおう
かつて高王はここに隣国の使者を招き、
盛大な宴を催して接待し、
楼から見渡す大地をもって、その隣国に奉仕することを誓った。
いくつもの国に対して高王は同様の約束をしつつ、

いまにもどこかで烽火が上がるのではないかと、
びくつきながら欄干から眺めていた。

いまは霞む彼方に屋根の先がぼんやり見えるだけであるのだが、
野にはなお戦に倒れた人々の骨がそのままに埋れているのだろう。

百年にわたって競い合った豪傑は誰もいなくなり、
いまとなっては魚と蝦が争ったようなことになったのだ。

(宋の一つ前の時代は五代十国ごだいじゅうこくと呼ばれる分裂の時代で、荊州には高氏が建てた小さな国があった。大国の狭間で生き延びるために、高氏は徹底した弱腰外交で周囲の全ての勢力にひたすら媚び諂った)

其の七

年末の荊州は風雪の日が多く、
そうでなくても旅人の心は落ち着かない。

町の人や村の人が嬉々としているのは、
昔から季節行事を重んじる土地柄で、
鬼やらいの日を待っているのだ。

いよいよその日になると、
竹を爆発させる音に、
子どもたちがわんさと集まってくる。

その賑わいのなかで、

私はしみじみと故郷の友人を想うのである。

其の十

荊州城の南門から始まる大道を馬で走り、
春の陽射しが注ぐ野に至ると、
秋の枯れ草を焼いた跡から、
風に誘われて緑が芽生えようとしている。
荊州から道は縦にも横にも北にも南にも通じ、
天下を自在に往来できるというのに、
かつてのこの王様はどうしてあまで弱々しかったのだろうか。

■ 涇陽早発

荊州からは陸路で都に向かった。涇陽^{れんよう}を早朝に発って、馬上での作。

富貴なるものかもともとから定まっているのではないとしたら、
栄えたり衰えたりするのはその人自身によるということになるだろうか。
だとすると、功名心が身の内でやかましく騒ぐのが当然で、
私に限ってそのようなことはないなどとは言っていられない。
それでちんまり縮こまっていられなくて、
こうしてそろりそろりと旅に出てきた。

それでも西に故郷を想うことがある。

我が田園が荒れるのは覚悟の上だ。

外に出てきて何をするのかというと、

あくせく富を稼ぐ気はない。

天下に何かしら足りないものを補うのだ。

それができなければ、怠け者で愚か者だったということになる。

人生は意気を重んじる。

出処進退にためらいがあってはならない。

春を迎えたいま、

故郷の水辺では蓮が葉を広げ始めているだろう。

湖をおおいつくすまでに蓮を育てあげてきた先人の営みに、

何かしら敵うようなことが私にできるだろうか。

■夜行観星

早朝の出発は星を上を仰ぐこともあった。

どこまでも高く涯のない天空は、

夜の厳かな霧囲気に満たされている。

無数の星が正しくその位置におさまり、

大きな星は射るような光を放ち、

小さな星は闇から湧き出てくるかのようだ。

星とはそもそも何ものなのか。

天界と人界とは干渉し合うものなのか。

世の人々は、星に一つひとつ名を付け、

あれは箕みの形、あれは柄杓びしやくの形と、

無理に見立てようとする。

箕も柄杓も人の道具で、

天にとっては無用であるのだから、

星は自分からそのように名乗りはしない。

遠くから何かに似ていると想像するのではなく、

近くに迫って星を見たらどういことになるだろうか。

考えてもまるで掴みどころがなく、

溜め息をつくしかない。

■漢水

この地方の中心都市である襄陽じょうように着く直前の詩。

竿を捨ててからのこのひと月ほどの旅は、

ずっと砂ぼこりに悩まされ通しだった。

襄陽の手前で滔々と流れる大河に出合い、

その清らかさにさっぱりと身を洗われた気分になり、
 この心持ちは故郷の蜀江しよくこうのほどりに立つのに似ると感じた。
 それもそのはずで、聞けばこの川は、
 蜀の地から我らの旅とは反対まわりで流れ出てきた漢水かんすいなのだ。
 蜀江はなかに鯨も棲もうかというくらいに水量が豊かで、
 漢水もまた広々として、軽々しく渡ってみるようなことはできない。
 遙か二千年の昔に、このあたりにも周しゅうの文王ぶんおうの教化が及び、
 遊女も礼儀正しさをわきまえるようになったと聞いている。
 漢水の水の音はそれから変わりはないのだろうけれど、
 世の変転いりかえとともに、古ふるのよき風はすたれ、
 川風が寒々しさを帯びて吹き過ぎてゆく。
 私は文王の時代を偲び、
 蜀から流れてきた川に向かって、
 我が身なりをきちんと整えるのだった。
 (周の文王の治世は、儒学の伝統において理想の時代のひとつとされた)

■岷山

襄陽の町の南に岷山けんざんという有名な山があり、その山頂において悠久の時間の流れに思索を巡らすことが数百年以上前から繰り返されてきた。

遠く南からきた我らの前に、
ぼんやりと春の塵に包まれる山があった。
登ってみると、山頂の幅は百歩にも満たないけれど、
眼下には、広々とした大地をひと呑みにする。
たちまちもの悲しさに襲われるのは、
千年変わらぬ感慨がここにあるからなのだろうか。
私のこの憂いを後に誰が知るのか。
私はいまを生きているのに、
未来を想ってここに苦しんでいる。
山の上には堂々とした不変の檜ひのきの巨木があり、
年々緑を取り換える柳を見下ろしている。
大才と小才はもとから異なっているのか。
永久性と一体化することは可能なのだろうか。
旅人が山の上にいる時間などは、
星の光が魚籠ぎょくの底に達する一瞬のきらめきにも及ばない。
現時点では、賢と愚はまだ分かれていないようであっても、
後からくる人にはすでに明明白白となっているのであろう。
未来へと思いを馳せると苦しみばかりが生じる。

■隆中

襄陽りゅうちゆうの西の隆中りゅうちゆうに諸葛孔明の旧宅があった。劉備りゅうびがいわゆる「三顧さんこの礼」で諸葛孔明を軍師として迎えたところである。

諸葛孔明が西の蜀にきて以来、
諸葛孔明への蜀人の愛は千年変わることがない。
今朝、諸葛孔明の故郷にきて、
蜀を故郷とする私は悲しみに耐えられない。
この山がちの何の変哲もない土地から、
天子の軍団を指揮する人が出ようとは、
当時の人々は思いもなかっただろう。
世に出る前の諸葛孔明をが臥竜と呼んだ人がいた。
竜がわだかまっていたときには、
ここの山水も秀でて見えたのだろうか。
竜がここから去ってしまうと、
棲んでいた淵も消えてしまったのだろうか。
せめて竜が尻尾を引き摺った跡だけでも見たいとの願いは、
おなしく叶わず、はらりと涙を落した。

■新渠詩

とう唐州で、かつてここに用水路（新渠）を掘削して広大な農地を開拓した趙ちやう
しようかん尚寛の治績を想った。

さらさらと水路を流れる水が、
やがて四方に分かれて広い沃野を満たす。
かつて民衆は、このような水路が、
まさかできるとは思っていなかった。
町の長官が大河の堤防を修復して新たな水路をつくと、
水はあたかも自ら赴くかのように、
水路の左右の田へと注がれ、
雲のように稲穂の広がる風景が生まれ、
この地の人々は初めて米の味を満喫できるようになった。
貧苦にあえいていた周辺の民衆は、
水路が完成したと聞くと、
家族を連れて我先に開拓地へと向かった。
長官は言った。
「見よ、ここに広大な土地がある。
好きな場所をおのおの選び取るがよい。
自分で耕し、得たものは自分で食べてよい。」

いずれ土地は諸君らのものになる。
もといた村に帰ってこのことを吹聴し、
大勢の人々をここに連れくるがよい」
皇帝は、その長官を都に呼びもどすことなく、
七年の間、この地での仕事に専念させた。
以来、民衆はここで十分な食を得て、
立派な家をここに築き、
ここで死んで代々の子孫によって祀られるようになった。
天命に適うこの善政によって、
民衆は永く安らかに暮らしていられるのである。

■許州西湖

きよ許州で、先の唐州の事例とは対照的な事業について詩を詠んだ。

春の雨が軽やかに降り注がれて、
からりと晴れ上がると、
許州の西湖はこのほか美しさに映える。
さざ波を立ててここに流れこんでくる水は、
古い城郭の角で、
昨夜、その響きを耳にしていたものだ。

かつてこの地の長官は春の遊びの場を作ろうと、
千人の男の腕を使って沼地をさらった。
民衆が土を掘り出して担いで運んだありさまは、
蟻の大群がうごめくかのようにであったという。
いま桃の花が咲こうかという時分になっても、
寒さが残っているのが恨めしく思われるのだが、
いくつかの梅の花がまだ落ちずに品のいい姿を保っている。
いずれ春の野遊びをする人々がここに集まり、
酔って杯を持ったまま道に伏せ、
助け起こしてもまた倒れるというようなことになるのだろう。
湖のほとりに建つ楼閣は立派で美しく、
ここを穿った長官は、
そこで民衆とともに春の風光を愛でたという。
町のお歴々は長官とともに喜んだであろうが、
労働に駆り出された農民の痛みは知らずにいたのだろうか。
このあたりは七年もの間、十分な稔りがなく、
村は長く寂しげであったという。
遠く旅をしてきた私は、
湖の岸に立ってしばし思いにふけるのだった。

■双覺観

しょう葉県にある道教の寺院、そう ふう かん双覺観を訪ねての詩。ここには漢の時代に県知事であったとされるおうきょう王喬が祀られていた。

王喬は仙人だったという。

たまには人の世でものぞいてみようと思立ったのか、

するにことかき役人になって、

毎月きちんと都に上って皇帝への行政報告までこなした。

皇帝は、王喬が馬に乗ってくる様子がないのを不審に思い、

王喬の現れる日に、ものかげからこっそり観察した。

すると、南方から二羽のけり鳥が宮殿に向かって空を飛んできたかと思うと、

すぐに王喬が宮殿に姿を見せたのだった。

そこで、網を用意させ、

次に鳥が飛んできたときに、ぱっと広げさせた。

網には二つの靴がひっかかり、

それから王喬はぱったり姿を見せなくなった。

本当に仙人であるのなら、

そんなどじを踏むはずがない。

人々にあっと言わせるための洒落だったのか。

そもそも、仙人がこの世にのこのこ出てきて、

役人になるというのがおかしい話だ。

われわれは現実の世の縛りのなかでしか生きられない。

こんなふうにおちよられたのではたまったものでない。

つまり、王喬の話はそもそもひどいいかさまで、

笑って聞き流せばよいだけなのだ。

■阮籍嘯台

蘇軾は以上の3首を通じて、自分がこれから官僚の一員としてどのように生きていくべきかを考察したのだろう。そして、いわゆる「竹林の七賢人」の一人、げんせき阮籍の旧跡を訪ねての詩。

阮籍は達人にして狂人だった。

世を逃れ、言葉を発しなかった。

高い志は万物の上に出て、

世俗の論に関わらなかった。

胸の内に意気が充満すると、

独り高台に登り、

身もたえし、

息とともにそれを吐き出した。

阮籍の激越な思いは、

大地を揺り動かさんばかりであった。

酔っては昏々と眠り、醒めては嘯うそぶいた。

乱世に生きながら己を貫いたことにおいて、

阮籍に比べられる者がほかに誰かいただろうか。

■大雪独留尉氏有客入駅呼与飲至酔詰旦客南去竟不知其誰
旅の終わりに、ある旅人と出会った。

どこもかしこも雪がいっぱいに積もり、

古びた宿場はひっそりとして人影がなかった。

そこに北から一人の旅人がやってきた。

降り続く雪のために、払っても払っても追いつかないのだろう、

笠にうず高く雪を載せて、その人はやってきた。

馬から降りて、宿へと入ってきたその顔を見ると、

寒さのせいでこわばり、青を通りこして黒いくらいだった。

私は旅人を招き寄せ、

温めた酒をすぐに持ってくるよう、宿の者に言い付けた。

旅人は酒を手にしたものの、

体が凍えすぎてしまったのだろう、

飲み下すことさえなかなかできなかった。

どこの誰であると互いに言い出すこともないままに、

二人で酒を酌み交わした。

私は杯に軽く注いでちびちびやるのだが、

旅人は体が温まってくるとともに調子が出てきたのだらう、

いつしか樽をさかさまにして呑み尽すまでになった。

大雪のために宿は昼間のうちに門を閉ざし、

二人は大いに語り合って、

夜が更けるのも知らずにいた。

翌朝、びしりと馬に鞭を当てると、

旅人はたちまち走り去った。

どうとう最後まで二人は名乗り合うことがなかった。

(時は春の半ば、果たしてこのような大雪が降ったのだろうか。全ては幻想で、これより役人生活に入ることによって失われてしまうであろう何かを去り行く旅人に託したのだろうか)

■刑賞忠厚之至論

故郷を発ってから4カ月余り、嘉祐5(1060)年2月に蘇軾は宋の都、

東京開封府(汴京)に到着した。蘇軾と弟にとって2度目の都であった。

1度目はすでに触れたように、3年ほど前、科挙を受けるために半年余り都に滞在した。そのときのことを見ておこう。

(父の蘇洵は、38 ページで見たように、27 歳で発奮して学問に向かい、兄の蘇渙に続こうと科挙に挑んだ。しかし、不合格となり、祖父の蘇序が亡くなった頃には科挙への思いを絶ち、己の学術によって身を立てる決意をした。すでに 40 歳を超えていた。それから 2 年ほど経った至和元 (1054) 年、蘇軾は 19 歳で、眉州青神県の王土方せいしん おうしほうの娘の王弗おうふつを妻として迎えた。同じ年に、蜀しよくにちょっとした騒動が持ち上がり、それを鎮めるために朝廷の大官である張方平ちやうほうへいが成都に派遣された。その翌年、蘇洵は学問に沈潜してきた成果を幾つかの論文にまとめて張方平のもとに見せに行った。張方平は驚き、蘇洵を推奨する手紙おうようしゆうを歐陽脩らに書くとともに、都に行くよう蘇洵に勧めた。蘇洵は上京するのなら、息子 2 人も連れて都で科挙を受験させようと考え、嘉祐元 (1056) 年春に眉山を發った。このときは北回りの陸路で、長安ちやうあんを経由して都に入った。夏に到着してすぐに、8 ページで見た洪水に遭遇した。蘇洵が新たに書いたものを歐陽脩のもとに持参すると、歐陽脩はそれを激賞し、幾人もの名士に蘇洵を引き合わせるとともに、朝廷にも推薦した。蘇洵の文章は、歐陽脩がかねてから提唱していた文学の改革にまさに一致するものだったのだ。その年の秋に、蘇軾兄弟は科挙の一次試験に合格した)

嘉祐 2 (1057) 年 1 月、蘇軾兄弟は宮中で行われた二次試験に、全国から集まった受験生とともに挑んだ。その試験で蘇軾が書いた答案の一つがこの小論文で、『刑賞は忠厚けいしやう ちゆうこうの至り』について論ぜよ』という課題に応じたものだ。「忠厚」とは真心、為政者は刑や賞を民衆に与えるときに真心の限りを尽くさなければならないという意味のことが昔からいわ

れていて、それについて現代的意義を論じたのである。細かいところは省いて大意を訳す。

大昔の理想の天子^{てんし}は、民を深く愛し、民を切に思いやり、人を尊重することを基本として天下を治めました。一つでも善い行いがあれば、それを賞した上で、歌って讃えたので、人は楽しんで善行を始め、最後までそれに努めました。逆に一つでも悪い行いがあれば、それを罰した上で、憐れんだので、人は悪いことはやめて、善いことをしようとしました。

このような言葉がありました。「賞を与えるべきか疑わしく思ったときには与えるのがよい。恩愛を広く民に及ぼすことができるからだ。罰を与えるのを疑わしく思ったときにはやめておくのがよい。刑を慎むことができるからだ」。実際に聖天子^{きょう}の堯の時代にこのようなことがありました。皋陶^{こうとう}という人が死刑を行おうとして、執行を三回申請しました。しかし堯は三回とも赦すように言いました。天下の人々は皋陶が厳格であるのを畏怖し、堯が寛大であるのを喜びました。また、四岳^{しがく}という人が、ある犯罪人を赦して仕事に就けるようにしたらどうかと提案しました。堯はそれはできないと一度は言いましたが、その後で、試みに用いてみようと言いました。この二つの例から、堯の心は明らかであります。

こういう言葉もありました。「罪の疑わしいときは刑は軽くせよ。功績の疑わしいときにも賞は重くせよ。無実の者を殺してしまうよりは、罪ある者を取り逃す方がまだましである」。すべてはこれに尽きます。賞を与えるか与えないか、与えなくてもよいとき

にまで与えるのは思いやりが過ぎます。罰を与えるか与えないか、与えなくてもよいときにまで与えるのは厳し過ぎます。思いやりが過剰であっても人として欠陥があるとはいえません。しかし、厳し過ぎるのは残忍であって人間性を失います。

昔は賞として地位や俸禄を与えることはなく、罰として刃物を用いることはありませんでした。地位や俸禄を与えれば、賞はそこだけにとどまって、それ以上の広がりを持たないからです。刃物を用いれば、刑はそこだけにとどまって、それ以上の広がりを持たないからです。天下にあるありとあらゆる善を全て賞するのに、位や俸禄はまるで足りません。天下にあるありとあらゆる悪の全てに刃物を用いたら悲惨なことになります。昔の天子は賞も刑も疑わしいときには全てに思いやりを及ぼし、世の人を正しい生き方へ導いたのです。ですから刑罰は厚い真心、すなわち忠厚のこの上なきものであると言ったのです。

(このときの二次試験の実施に当たった試験委員長が他ならぬおうようしゅう欧陽脩であった。当時は、先の「遠景楼の記」に記されていたように、美文がきちんと書けるかどうかを重視する傾向がなお強く残っていて、受験生は徹底してその技を鍛え、合格間違いなしと前評判の高かった美文家が幾人もいた。欧陽脩は委員長になったのを機に、美文偏重の風潮を一掃しようと、上辺ではなく内容重視で採点すると決め、自分と価値観を共有する者を試験委員も集めた。その1人にばいぎょうしん梅堯臣がいた。梅堯臣は採点委員として蘇軾のこの論文を読むと大いに感心し、これこそ首席ではなかろうかと欧陽脩に見せた。欧陽脩もまさにその通りだと思ったのだが、「もしかするとこれはそうきょう弟子の曾鞏が書いたのではなかろうか、自分の弟子を首席にしたら、身最眞との批判を受けるかも

しれない」と迷い、最終的に2番目の者と順位を入れ替えた（科挙は一切の不正が入り込まないよう入念に実施され、答案は全て係りの者が写し替え、採点者には誰が書いたものか全く知れないようになっていた）。発表当日、歐陽脩が驚いたことに、首席が曾鞏で2番が蘇軾であった）

（蘇軾のこの論文は、歴史上の事例を幾つも織り込みつつ、自分の考えをきちんと述べていて、科挙の答案の模範のみならず、名文の代表として高く評価された。しかしながら、ここに引かれている堯と皋陶の問答は実はどこにも基づくものがない。あからさまに言えば蘇軾が「捏造」したのである。論文の構成と内容があまりにもみごとであったので、採点者全員が何らかの出典があるものと思い込んでしまったのだ。「捏造」とわかってからも、蘇軾が一生を左右する大きな試験で堂々とそのようなことをやってのけた豪胆ぶりがかえった称賛された）

（科挙の二次試験に合格した兄弟は3月に皇帝の臨席のもとで行われた最終試験に進み、877人の合格者の1人となった。成績はあまりぱっとしないものだった。最終試験は基本的に不合格者を出さずに、皇帝が成績の順位を決める目的で行われ、順位は後の出世に影響した。むろん皇帝自身がいちいち採点するわけではなく、誰かが皇帝に代わって成績順を決めるのだが、恐らくは、歐陽脩とは異なる基準で採点されたのであろう。ちなみに、試験前に前評判の高かった美文家は軒なみ二次試験で不合格となり、それを不服とした落第生たちが歐陽脩の家を囲んで示威行動をするといった騒ぎもあった）

■上梅直講書

晴れて科挙に合格した蘇軾は、先の「范文正公集叙」^{はんぶんせいこうしゅうじょ}に記されていたように欧陽脩を初めとして多くの著名人と会うことができた。これは梅堯臣に差し出した文章である。

私は書物を読んで、周公旦^{しゅうこうたん}が苦しい胸の内を詩や手紙に託したところに至ると、いつも悲しく思いました。周公旦は甥の成王^{せい}が位に就いて以来、誠心誠意補佐しようと努めていたのに、弟が間に入って、周公旦は王位を奪おうとしていると成王の耳に吹き込んだのでした。周公旦ほどの人であっても、不遇の時があったのです。

その周公旦を誰よりも尊敬してやまなかったのが孔子^{こうし}で、孔子にもまた不遇のときがありました。孔子は、陳国^{ちん}と蔡国^{さい}の大臣に嫌われ、野において囲まれて進退に窮しました。食糧の道は絶たれ、一行に病人も出ました。それでも、孔子はいつも通りに琴を奏でて歌い、弟子の子路^しや顔回^{らん}らと学問を論じ合っていました。

孔子は言いました。

「昔の詩に、『犀でもなく虎でもない。なのに我等は荒野を行かねばならない』とあるのは、戦に駆り出された民衆の嘆きの声だと聞いている。私もまた荒野に行く者なのだろうか。私は間違った道にきてしまったのだろうか」

顔回は言いました。

「先生の道はとても大きいのです。ですから、天下はそれを容れることができませ

ん。容れられなくても苦しむことはないのです。容れられず、しかしその後偉大な人物になった人だっているではありませんか」

孔子はにっこり笑い、

「顔回よ、君が財産家になったら、私は君の家の金庫番になりたいものだ」

と言いました。

孔子は、天下に容れられなくても、その弟子たちとこのような冗談を交えた問答を楽しんでいたのです。

周公旦は実際には富貴で、孔子は貧賤でありました。孔子の貧賤に周公旦の富貴は及ばないのではないのでしょうか。周公旦は賢人でありましたけれど、その弟でさえも周公旦の心の内がわかっていませんでした。周公旦にはその富貴をともに楽しむ相手がいませんでした。孔子には貧賤をともにする人々がたくさんいて、いずれもが天下の賢才でした。そしてともに楽しむことができたのです。

私は七、八歳のころ、初めて書物を読み、いまの世には欧陽公(欧陽脩)という人がいて、その人なりは昔の孟子や韓愈のようであると聞きました。また、梅公(梅堯臣)という人がいて、欧陽公と交流があり、二人の議論はどちらが上でどちらが下ということはなく、互いに磨き合っているということも聞きました。

それから成長して後に、初めて梅公の詩文を読み、その人となりを想像しました。俗世間の楽しみから飄然と抜け出て、自ら楽しみとするものを楽しんでいるのであろうと思いました。

さらに成長して、美文調の文章を書くことを学び、お上の下さる禄を食もと願いまし

たが、自分のことを自ら評価するに、とても官員の仲間には入れないだろうと思いました。このたび上京して年を越えましても、いまだかつて官員の誰かの門を訪れたことはありませんでした。春に天下の優れた人々が宮中に集まり、欧陽公と梅公が親しく審査された試験を受けましたが、全く思いもよらず、私は第二位の成績で合格させていただきました。ある人から伝え聞いたところでは、梅公が私の文章を孟子のようで結構ではなかろうかと評価してくださったとか。そして、欧陽公もまた世間の並みの人が作る文章ではないとして、私を採ってくださったとか。私を指導してくださった方々が私を採ってくださったわけでもなく、かねて親しくしてきた方々に採って下さいと願ったわけでもなく、お二人が採ってくださって第二位となったのです。

その結果、先の十余年の間に、その名だけを聞いて見ることもできなかった方々と一朝にして知り合いにもなれたのです。

さて、考えますに、人は何のわけもなく富貴になるものでもなく、何のわけもなく貧賤になるものでもないのでありましょう。立派な賢人がいて、その仲間となるのならば、富貴も貧賤も関係なしに互い心と心を支え合うことができましょう。たまたま一時の幸運によって、数十人の従者を引き連れる身となり、町の人々が見物に出て讚嘆するようなことになったところで、賢人同士がまじわる楽しみには替えられないのです。

孔子は不遇であり続け、亡くなる前の年に、「天を怨まない、人を咎めない」と言いました。まことに悠然と遊ぶようにして一生を終えたのでした。

梅公のお名前は天下に知れわたっています。それでいてその位は五品でしかありません。その容色は温和で怒らず、その文章は寛厚敦朴かんこうとんぼくにして怨みの言葉はありません。それはここに申し上げた賢人の集まりを楽しんでおられることによるのでしょう。私もその楽しみにあずかせていただきたく願う次第です。

(周公旦は、52 ページで見た周の文王の弟で、儒学の伝統において極めて高く評価されてきた人物。孔子は晩年に「久しく周公旦の夢を見ない」と衰えを嘆いたほどに尊敬してやまなかった。その周公旦を引き合いに、孔子をより高く称賛するという離れ業をやって見せたというのが、この文章の一つの眼目である)

(梅堯臣はこのとき 56 歳で、官位はここにあるように五品であった。官位は最上位の一品から九品まであり、五品はちょうど真ん中であるから、56 歳にして五品は遅い出世であるのだろう。とはいえ、そもそも官員になっているのだから必ずしも不遇とはいえないのだろう。官員として日の当たる場所に立ったことはなく、下級、中級の官僚として極めて地味な役人生活を送った。その中で、宋の時代の新しい詩を生み出す努力を人に余り知られずに続け、後に文学の改革を唱えて華々しく登場した欧陽脩によって偉大な先駆者として顕彰されたことで、ようやく天下にその名が知れわたった。科挙の二次試験の委員に招かれたのは梅堯臣にとって初めの栄誉で、そこで蘇軾の文章に巡り合ったのだった)

(自分を引き上げてくれた大先輩に何か文章を差し出すときに、どのようなことを書くだらうかと想像すると、この蘇軾の文章がいかにも非凡であるのか、幾分か知れてくるであろう。蘇軾は「よろしく御最員を」みたいなことは言わないし、先輩をやたら

と賛美して媚びるようなこともしない)

■記先夫人不残鳥雀

科挙の最終試験の合格発表は3月11日で、故郷の眉山で朗報を待っていた母はそれから1カ月もしない4月7日に他界した。

(蘇軾の母がどのような人であったのか、それは後に司馬光しぼこうが書いた墓誌銘によって知ることができる。司馬光は巨大な歴史書『資治通鑑しじつがん』を編集した人である。蘇軾の母と交流があったわけではなく、蘇軾兄弟の依頼を受けて、提供されて資料に基づいて墓誌銘を書いた。執筆の時期は本文にあるように蘇洵の亡くなった直後である。本文にある「程夫人てい」が蘇軾の母。また、「制科せいこに第三等で合格」とあるのは次章で見ることになる。

治平三(1066)年夏じへい、蘇府君そふくん(蘇洵)が都で亡くなったので、私が弔問に行くと、遺族の蘇軾と蘇轍が泣きながら次のように言った。

「私達は父の棺を蜀の地に埋葬するために帰郷します。蜀人の習慣として、夫婦は墓を一つにし、内に二つの室を設けることになっています。かつて父が母を埋葬したとき、母の室に墓誌銘を刻みませんでした。この機会にあなたさまに託して墓誌銘を刻みたいと思うのです」

私は固辞したのだが、ついには引き受けることになり、このように答えた。

「程夫人の徳を残念ながら私は存じ上げません。どうかその概略をお教えください」

よって二人の子息は程夫人の事略を私に授けてくれた。

ていぶんおう

程夫人は程文応の娘で、十八歳で蘇府君に嫁いだ。蘇府君はこのとき極めて貧乏で、その一方で程の家は裕福だった。そこで蘇府君の家に来て程夫人がどのような振る舞いをするのか、一族の者はしげしげと見たのだが、程夫人には少しの落ち度もなく妻としての仕事を立派に努め、孝恭にして謹儉であったので、誰からも賢い女性であると認められた。

ある人が程夫人に言った。

「あなたの御両親は財産が乏しいわけではないのですから、援助を求めたならば、父母の愛で応じて下さいますでしょう。それなのに、苦しい暮らしに耐えて、どうしてあちらにひと言もおっしゃらないのですか」

程夫人はこう答えた。

「おっしゃる通り、私から父母にお願いすれば、きっと聞いて下さらないことはありませんでしょう。でも、もしもどなたかが、我が夫に『妻子を養うために誰かにすがったらどうだい』と言ったりしたときに、我が夫はどのようにするでしょうか。私は夫と同じようにするだけです」

程夫人はついに実家に援助を求めなかった。

このとき蘇府君の祖母がなお健在で、老いてますます厳格であった。家の者はその部屋の近くを通って、祖母の声が耳に入ると、何か叱られるのではないかと非常に恐れた。ただ程夫人だけは祖母の気持ちに適い、祖母はにこにここと話かけたのだった。

蘇府君は二十七歳になるまで勉強には見向きもしなかった。ところが、ある日のこと、興奮した様子で、程夫人に言った。

「私は我が身を顧みて、いまならまだ学ぶことができるように思う。しかし、家業のためには働かなければならない。学べば家業は廃れる。どうしたらよいだろうか」

程夫人は答えた。

「私はずっと申し上げたいと思っておりました。しかし、私からあなたさまを勉強に仕向けるということではきっとよろしくないと思っておりました。あなたさまが自分のお心から勉強されるのであれば、家業はどうぞ私にお任せください」
程夫人は自ら経営に乗り出し、数年の内に家は裕福になった。蘇府君は思い通りに学問に専念し、ついに大学者として大成した。

程夫人は読書を好み、書物の要点を把握し、息子の軾や轍が幼い頃は、程夫人は二人を自分で教え、常にこのように言って戒めた。

「書物を読むときに、同輩のことを気にするようであってはいけません。書物を読むとは、己をひとかどの人間にするためです」

さらに、程夫人はいつも古人の名言を引いて、二人を厳しく励ました。

「おまえたちが正しいことのために死ぬのであれば、私は少しも寂しいとは思いません」

二人は同じ年に科挙に合格し、さらに二人は同じ年に制科にも合格した。宋朝が始まってから、制科に第三等で合格したのは^{こいく}具育と軾だけである。

軾が鋭い直言で人を驚かせるのは、程夫人の教えによるのであろう。程夫人は息子のことをよく知っていたと言うべきである。

程夫人は家財がようやく豊かになったときに、嘆息してこう言った。

「これは福と言うべきなのでしょう。そうではありますまい。これは我が子孫を愚かにするものです」

財産を一族の困窮するものに分け与え、その生業を成り立たせ、結婚の仲立ちをした。地域の人が危難に遇うと財産を与えて救済した。そのために程夫人が亡くなったときには家には一年分の蓄えもなかったのである。

程夫人は嘉祐二年四月 癸 丑かゆう みずのどうしに郷里で亡くなり、その年の十一月 庚 子かのえねずみに墓地に葬られた。享年は四十八であった。軾が朝廷に用いられたことから武陽県君の称号ぶようけんくんを贈られた。

程夫人は六人の子を生み、長男の景先けいせんと三人の娘は早くに亡くなった。特に三女は程夫人によく似ていて、学問にも通じていたが、十九歳で嫁ぎ先で亡くなった。ああ、婦人が従順でその親族を仲睦まじくさせ、家の内をきちんとさせる知恵があれば、それで十分に賢いとされるだろう。まして、程夫人はその夫と子を発奮させ、教え導き、三人とも学識をもって天下に重んじられるようになったのだから、その見識の高さはとても真似のできないものだ。古の人は、国でも家でも、その興ると衰えるときに妻が関わらないことはないと言った。程夫人を見れば、古の人の言うことがますます信ずべきだと知れる。

その銘に曰く。

貧乏のときはその夫の名を汚さず、
 裕福になってもその子孫に累を及ぼさず、
 学問に努めることが一家の名を顕すことであると知っていた。
 真直ぐに世に栄をなし、
 夫を励まし、子を教え、
 その光は大きかった。
 しかし、その寿命はその徳に見合わなかった。
 その余った福を子孫に施すということなのであろう。

当時、都と眉山の間をどれくらいの時間で情報が行き来したのだろうか。
 科挙は天下の一大イベントであったから、合否の結果は迅速に眉山にも
 伝えられ、母は生前に2人の息子の同時合格を喜んだであろう。逆に母
 の訃報が都に届くにはそれよりも時間がかかったであろうが、蘇軾はせ
 っかく欧陽脩を初めとして都の名士と知り合う機会を得ながら、都に長
 く滞在することができず早々に帰郷して足掛け3年の喪に服したのだっ
 た。

(蘇軾の母は嘉祐2(1057)年11月に郷里の墓地に埋葬され、夫の蘇洵が次のよう
 な祭文を読み上げた。

ああ、君との好は百年と約束していた、

その半ばで私を棄てて先に逝ってしまうとは――

私は都に行き、遠からず帰ることになっていた、
君がこうも早くに逝ってしまうとは——
君は去って帰らない、
私は永く哀しみ続ける、
反復して君を思うのなら、
もしや帰りくるのではなかるうかと。
人は言う、
死生の短い長いは思い通りにならない、
誰もそれは異なることはない、と。
それはわかっているも悲しまずにはいられない、
生きてこれほどの災いはないのだから。
君には六人の子があった、
いま誰がここにいるのか。
ただ軾と轍だけだ。
ああ、君は二人を慈しみ育て、
二人はすでに成人となり、すでに結婚もした。
君は二人に学問を教え、
世に何も聞こえるところがないままではいないのを願っていた。
昼となく夜となく、君が子等のために尽くしていたのを、
ほかでもない私は知っていた。

私が子等を連れて東に旅立とうとしたとき、
門を出るのをためらわずにはいられなかった。
いま出発して、もしも思うところが叶わなかったら、
いつの時に帰ればよいのだろうか——
二人の息子は、私に言った。
「どうしてぐずぐずしているのですか、
後に悔やむことなどがあるでしょうか」
二人の息子は郷里を遠く離れ、寒さにも暑さにも耐え、
一つの試験に合格して宮中での試験に挑み、
堂々の文章を書いて、お歴々の方々を驚嘆させた。
二人の息子が喜んだのは、
官に就けるよりも何よりも、
自分等の文章が世に称えられたのを、
きっと母が喜ぶと思ったからだった。
二人の息子は、母が長生きすることを願っていた、
千里の彼方の故郷に帰ってみれば、
家は無人になっていた。
いくら泣いても母の姿を見ることはできないのだった。
私は、君が平生手にしていたものを見るにつけ、
しみじみと泣かずにはいられない。

ああ、私は老いて一人になった。

君が逝ってしまって、家の内の良き友がいなくなった。

終日孤独であるばかりではない、

過ちを為しても正してくれる者がいないのだ。

昔、私が若かった頃、

私は遊び呆けて勉強をしなかった。

君は何も言わなかったけれど、

心の内は穏やかではなかったのだろう。

私がいままでたってもふらふらしているのを、

君が心底憂いているのを知り、

私は慨嘆し、ついに気持ちを入れ替えた。

そこから、今日に至った。

ああ君は死に、再び君と時を同じくすることはできない。

あんちん さと り かりゅう
安鎮の郷、里の名は可竜、

ぶよう
武陽県に属するところ、

州の北東の小高い丘、

そこに君の墳墓がある。

墳墓には二室を掘った、

いつしかそこで私は君と一緒にいる。

骨や肉は土に帰るが、魂はそうではない。

私達の旧い家は一切を改めずにおこう。

我が魂は帰るべきところに帰るであろう。

ここに「子等連れて東に旅立とうとした」とあるのが、嘉祐元（1056）年春に蘇洵が2人の息子を連れて都に上ったことを指し、「堂々の文章」とあるのが先の小論文である)

蘇軾自身が母をどのように見ていたのか、後年記した短文がある。題名にある「先夫人」が母のことだ。

私が少年の頃、勉強部屋の前に竹柏たけしげや桃の木があり、その左右にたくさんの草花があった。木にいろいろな鳥がきて巣を作っていた。

母は生き物を殺すことを嫌い、子供にも使用人にも鳥を捕まえるのを許さなかった。何年かすると、鳥は低い枝にも巣をかけるようになり、その雛を上からのぞくこともできるようになった。

羽根が五色に輝く桐花鳳とうかほうも、毎日、四、五羽やってきて、そこらを飛び回るようになった。この鳥の羽毛は珍重され、なかなか見るのさえ難しかったのだが、我が家では人に馴れ、恐れることはなかった。近くの人が見にきて、これは珍しいと言いつけた。

これはほかでもなく、生き物に害を加えることのない母の誠の思いが、鳥にも信用されたからである。

土地の老人はこのように言った。

「鳥は人から遠く離れたところに巣を作ると、その雛は蛇や鼠や狐や狸や鷗や鳶に食べられてしまう憂いがある。だから、人が殺さないとかれば、むしろ自ら人に接近して、雛の危険から免れようとするのだ」

ということからすると、鳥が遠くに巣を作って人に近づこうとしないときは、人が蛇や鼠よりも悪さをすると鳥が考えていることになる。「苛政は虎よりも猛なり」という孔子の有名な言葉があるが、鳥の判断も全く同じで、思いやりのない人間のそばにいるよりは、自然の苛酷な環境下にあった方がまだよいと考えるのである。

(ここにある勉強部屋で蘇軾は喪の期間を過ごしたのだろうか。母の喪は嘉祐4(1059)年8月に明け、蘇軾は父と弟とともに都に向かった。それが本章でここまで見てきた旅である)